

## 戦後・学校地理への試案

——『私たちの生活』(1)～(4)を中心に——

樋口節夫\*

### I はじめに

戦前の学校地理は国民学校令による国民科の登場により終末期をむかえる。この教科の内容は「皇国の道」、その方法は「錬成」というのであった。この場合、国民科地理は「郷土の観察」からはじめ、わが国土および東亜を中心とする地理の概要を教えた。用意された教科書は『郷土の観察』（教師用書）および『初等科地理』（上・下）であった。その結論は下巻末に「いや栄えに栄えゆく、この大和島根に生をうけたわれら一億はらからは、今こそ大御心のまにまに祖先にはじない大東亜建設の偉業を打ち立て、世界永久の平和、友邦協和の喜びをよろずの民にわかち与えなければなりません。」と明示されている。したがって、そのスタイルは復古調、内容は戦時体制の特殊事情とはいえ異常なものであった。これらに関しては“国民学校で教えた地理”として、稿を改め、自分史の一齣を反省したく思っている。

ともあれ、昭和20年8月15日以降、日本では、総司令部の占領下、敗戦処理、旧体制の清算と新教育への啓蒙と普及がはかられた。世情混乱の中で、20年9月新日本建設の教育方針(文部省)、同10月日本教育制度に対する管理政策(総司令部)、21年4月第1次アメリカ教育使節団報告、同5月新教育指針(文部省)…と、次々に指針が示され、まず、軍国主義・国家主義思想の払しょく作業が進められたのである。新教科書編さんの試みは、

\* 大阪教育大学地理学教室

墨塗り・暫定教科書と地理教科書の回収、新構想のもとでの進行があったが、新教育制度の基盤となる重要法案の制定と実施は、21年8月日本国憲法、22年3月教育基本法、学校教育法…により再出発する。この間、学校地理の指針ともなる「社会科学学習指導要領」も21年12月には脱稿していた。所謂バージニア・プランをモデルにした試案である。小学校での場合、翌22年5月「学習指導要領社会科編（I）」(試案)となり、教科書作成が進行する。当初「社会科には教科書はいらない。先生と生徒が一緒になってデータを集め、考えながら問題を解決して行くのが社会科で、指導要領の単元もそのように作った。」と担当者は考えていた。それには、最初に社会科を、実験授業の形でとり入れた桜田小学校(東京都)での経験があったからだという。でも、「それでは困る」との当局や現場の声で、6・3制発足後において、急ぎょ学習の参考・資料として発行したのが、『まさおのたび』にはじまる一連の社会科教科書である。

以下に紹介する『私たちの生活』(1)～(4)は第5・6学年用として準備された文部省による国定本である。新教育の息吹を最も鮮かに伝えた当時の花型—社会科—の最初の教科書である。

近時、社会科の教科書批判が山積みするなかで、戦後、時代の推移とともに大きく変容した社会科そのものを、その初源にかえり再考することの大切さを痛感した。一連の書を戦後・学校地理のあり方を考察する資料として使用したい。

## II 『村の子ども』私たちの生活（一）

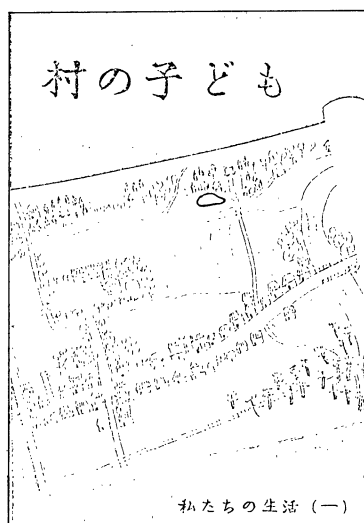
『村の子ども』私たちの生活（一）

翻刻発行 昭和22年9月15日 定価15円40銭

著作者 文 部 省 （5年用）

発行所 東京書籍株式会社

印刷者 凸版印刷株式会社 136頁



このテキストでは、三郎（酪農家）、すみ子（疎開児）、進（専業農）の3人を主人公に、村の子どもの生活環境から、四季のカレンダーにあった素材を得て、身近かな社会のしくみにふれ、問題解決の諸方策を学習する。

1. 五年になって は、三郎が朝学校に来るまでにすること（牛乳を町の集乳所へ）など、この学期に、クラスで調べ、実行しようとする事（生活のしかたを調べる、自分たちの生活を少しでもよくする）への導入である。

2. 委員会 は、すみ子（父・東京の病院勤務）

を中心に、新聞委員が協力し“たんぼ新聞”づくりのプロセスを追い、記事のなかみと、村の生活とのかかわりを理解する。

3. さまざまな協力 では、2班は田うえ、3班は田うえ時を担当し、前者ではともえの文、後者では話しあいをまとめた文、5班の大昔の狩は書きぬき文、先生が昔の漁業と今の漁業を調べた結果、4班の漁村見学記…等々から、村の生活誌をグループで調べる方法と、まとめ方を知らせ、「村びとたちのさまざまな協力」を考え、実行の方策を勉強する。

4. 誕生日 は、くに子（両親死亡）の誕生日に関して、村の行事のなかで、衣食住にかかわる家事の合理化と生活の向上を求め、友だちや兄姉との問答のなかから解答を得ている。

5. 夏休みの計画 では、三郎のクラスで、ひらいた自治会できめたことのうち、家業のことを調べ、村ではこうでありたい、こうした方がいいとか、考えることにつきあたれば、そこに村の問題があることを教えられる。経済・健康・衛生・交通・教育…の諸問題山積のなかで、農村生活のモデルを描くのである。

6. 夕御飯のあと では、進の家の夕飯のあとの話題が中心になる。話の中で、情報の伝達（郵便・電信・新聞・ラジオ）に関し、その役割と発達にかかわった人びとの苦心を再現する。地図に所要時間を記入する工夫など、考察のプロセスが大切にされていた。

7. 町からの手紙 は、神戸のおじさん（引揚者）から届けられた本、信一（戦中村に疎開）との交換文のなかから、人と人とを結ぶ友情を思う。

8. 新聞やラジオのなかった時代 は、3人の研究をそれぞれまとめた文である。ラジオ番組、新聞記事の働きや、交通・通信、旅のありさまを研究するなかで、まとめ方を教示する。

文末のジョン・ラスキンの詩“学校へいく路”

はたのしい明日への希望をうたっている。

ともあれ、本巻では村の子どもの生活を中心に、家庭から隣人、そして村から町へと話題を拡大し、それにかかわる村の仕事や行事をめぐって、よりよい方向への模索を試みる。そのさい、個人・グループ学習のなかで、解決策を読む・日記・手紙・討論・問答などから導き出している。各ページに盛られたテーマは、世相を反映するごとく配給・公定・疎開・戦災・復興・引揚…等、多彩であった。けれども、児童中心という各文の整理は、5年生の一文ではなく、編集文であることに変わりなく、本巻使用の指導者は各項の多くの事項から、何を重点に取扱い、地域社会の問題として子どもたちを指導するか、年間のプログラム作りがなかなか難しいことであったと思う。

### III 『都会の人たち』私たちの生活（二）

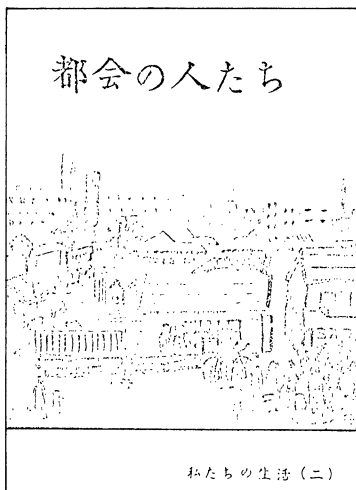
『都会の人たち』私たちの生活（二）

翻刻発行 昭和23年4月5日

著作兼発行者 文 部 省 （5年用）

発行所 日本書籍株式会社

印刷所 凸版印刷株式会社 142頁



このテキストでは、ふしぎな同居家族の構成員を中心に、戦後復興期の都市の諸相に素材を得、子どもたちの体験から、将来像を考える。全文、3人の子どもの日記風に、家族のこと、図書館・病院・工場のこと、学校での運動会・給食のこと、街道録音、都市気分、お米列車、百貨店での買物など、見聞から教えられた数々が盛られている。そのなかで、子どもが実行し、考える文体になっていた。

1. 私の家 は、じゅん子、道男の同居家族(母親が姉妹)が、敗戦後、疎開先から引揚げ、満員電車にも似た生活のなかで、互に協力し、希望にむかい生きて行く庶民の記録である。

2. 図書委員になって は、道男が委員になって、学級文庫のことを相談する。水谷君からの手紙(県立図書館の報告)を紹介し、その友情に感謝し、文庫をめぐり、為になることをやろうと決心する。

3. 大きな病院 は、じゅん子のおじさん(病院勤務)を通じ、都市の大病院を見学し、戦後、栄養不足から結核患者の多いこと、ツベルクリン、レントゲンのことや、ロベルト・コッホの業績を通じ公衆衛生の重要性を体得する。

4. 工場の見学および 5. 紡績工場へ は、道男の父の紹介で見学した針布工場、紡績工場の見学記録である。そのなかで、両工場の立地や工場配置、操業事情を認識する。従業員の出身地や工場分布、それに、原料や製品の配送などから国内・国外との関係がわかる文体ともなっている。

6. 学校給食 は、みんなで調べたことをじゅん子がまとめた文である。そのなかで、給食係や衛生室の先生、それに調理の人、市役所の係の人たちの働きから、給食をめぐる社会の仕組みを知る。そして、「自分たちだけたくさんたべても、他の国の人びとがたべられないで困っているのを見てはうれしくない。」と、考えることのできる心を期待

する。

7. **ビルディングのしらべ** は父の会社がある都心のビルをグループで見学した報告から、調査法を考え、ビルのはじまり、働く人びとの動態や所在するオフィスや商店その他のレイアウトを知る。そして、なぜ、これらの職場を天国と思考するかを考える見学社会科そのもの。

8. **運動会** は、父（元学校長）の同僚であった安井先生の許に届いた父兄からの手紙を夕飯のあとで読み、学校行事の一つ運動会のあり方を検討する素材にしている。当日の服装・用具・昼食…などに、時の流れを知るなかで、どのようにして自前の行事を運営するか、子ども、父兄、職員が心と心の結びのなかで、役割遂行する実際を知らせる。

9. **街頭録音** は、復興期の市民の声を、駅前に拾い、施策に反映することの実際を描写する。世相を示す住宅問答を解決するささやかな庶民の願いが汲みとれる。

10. **銀行の仕事** は、貯蓄週間に銀行の人から聞いた話（原稿筆写）をもとに、資源不足、貧乏の国日本が復興するために、炭坑・工場・鉄道・住宅などを更新する必要性を説き、それらに関わる銀行の役割を考えた。

11. **都市の気分** は、年の市<sup>としいち</sup>のことから昔話に花が咲いた道男の家の夕べが語られる。昔の山手や下町には江戸の名残りがたくさんあったが、今の都市生活では何をしても構わない気楽さがある。そこで無責任になりがちだが、お互いに心をうちあけ、つきあう大きな気持が必要と結んでいる。

12. **お米の列車** は、米・野菜・魚などが生産地から都市に集まるルート、貨物駅・操車場の見学を通じ把握する。同時に、都市から地方への製品の配送、荷役の今昔を知る。

13. **これからの都市** は、東京の復興をいなかの清に知らせるなかで、技師の話から都市復興計

画が実行され、「わざわざをかえて福とする。」という諺のごとく、現実化することを考える。

ともあれ、3人の子どもを中心に、各種の都市施設（住宅・学校・図書館・病院・工場・銀行・駅…）の見学から、市民生活の実際にふれ、そのあり方にふれ、理想像を追う。当時の都市社会の理解に好資料を提供している。しかし、結果をいかに体系化するか、難しいことであった。のちほど、見学社会科や“ごっこ学習”の悪弊を生み出す背景はこのあたりにあった。本巻では、難しい社会の問題を解決する子どもなりの解答を、お父さんやおじさん、兄、銀行の人、技師のこぼれをかり、間接的に答を導き出しているが、考えさせられる所であった。素材は地方の都市からも得てほしかった。

### 3. 『土地と人間』私たちの生活（三）

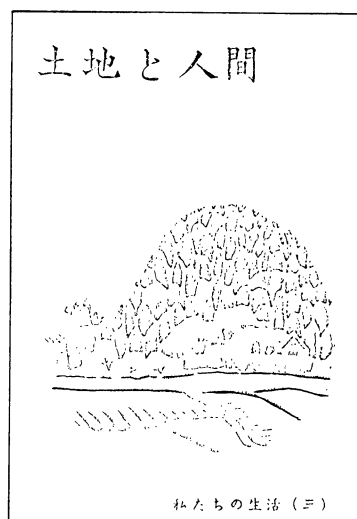
『土地と人間』私たちの生活（三）

翻刻発行 昭和22年8月25日

著作兼発行者 文 部 省 （6年用）

発行所 東京書籍株式会社

印刷所 東京書籍株式会社 144頁



このテキストは、日本の諸地域に展開する人びとの生活を大阪平野、関東の台地、諏訪盆地、木曾谷、九十九里浜にモデルを得て、その土地なりの生活を形成するプロセスを追い、“土地と人間”のかかわりを考え、身近な地域社会の生活向上への方策を模索する。

1. **地図をながめて** は、地図をながめ、つくる苦心、そのはたらきを考え、読み、描くなかで、私たちの生活しらべをする方法をまとめ、地域理解への導入とする。

2. **川ぞいの土地** は、「ここは大阪平野です」にはじまる。この地方の人びとが、どのようにして自分たちの生活をきりひらいてきたか、努力のあとを例証する。生活のための水とのかかわり、陸をつくること、大阪の町の発展とその近代化など、大和川・淀川の川ぞいの地方の発達史的把握である。これを一つのモデルに、濃尾・越後・筑紫・石狩平野など諸平野を考え、その地方なりの特色把握へと進行する。

3. **台地のひろがる地方** は、現代の関東平野が下流に発達した低地と、丘つづきの台地から成り立つことよりはじめ、前者は大阪平野の理解を基礎とし、台地について改めて考えようというのである。その特色（稲がつかれない、飲料水が得にくい）から、人びとはどのように開墾したか、農家の事情を考察する。そして、なぜ多くの人びとが住むようになったか等を、江戸中心に考え、東京の現況におよぶのである。その他の台地（牧の原、青森県東部、十勝平野…）にもふれ、台地の生活を追究する。

4. **山にかこまれた土地** では、諏訪盆地や京都・奈良盆地が登場する。前者では盆地での農業・工業（養蚕・製糸・寒天製造など）を主体に、後者では古都の盛衰を、その環境との関係で把握する。

5. **山の地方** は、日本の自然描写で特色づけ

られる山と峡谷、火山と湖沼、そして温泉などの理解にはじまり、木曾谷にモデルを得て、山村生活（林業・通路と宿場、電源など）の昔と今を考え、火山のすその利用や国立公園のことにもおよぶ。鉱山の項で石油が登場しないのは、どのような事情によるのだろうか。

6. **海べりの土地と沖あいの島** は、砂浜や岩石海岸での漁民生活を、九十九里浜に例を得て把握する。瀬戸内沿岸では塩と自然とのかかわりを考え、各地の港の歴史から、今の貿易港の立地におよぶ。沖あい、なかでも離島への関心を隠岐の生活誌にもとめ、その将来計画を考えさせる。

ともあれ、本巻での各資料は、モデルとした地方の人びとの生活理解が、それなりに可能であっても、重点的取扱いのために、多くの空白部をうみ、指導者による体系化と、地元に関する副教材が用意されなければならない。また、地域開発に偏り、地域と地域との関係把握に困難する。かつ、「日本の地形区分」が小単位のために、地域の一般化には無理があった。各プロセスのなかで、近代化の問題がもっと取扱われてよいとも考えた。

なお、一つ、付記したいことは、速急に脱稿しなければならなかった当時では、所詮、しかたなかったことではあるが、読ませる地図が粗雑であったり、各所に「初等科地理」参照の注がついているのはどうしたことだろうか。反省したいものと思った。戦前の学校地理にはみられない新構想、新タイプによるテキストの試みとしては立派ではあっても、これをどこまで、教師や子どもたちが消化できたか、考えさせられた。

#### IV. 『気候と生活』私たちの生活（四）

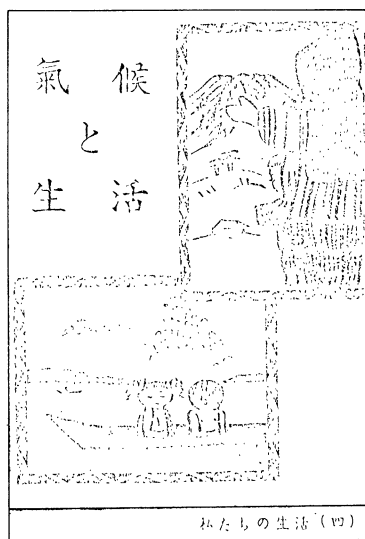
『気候と生活』私たちの生活（四）

翻刻発行 昭和23年3月25日

著作兼発行者 文部省（6年用）

発行所 東京書籍株式会社

印刷所 東京書籍株式会社 (170頁)



このテキストでは、熱帯・寒帯・温帯の人びとの生活がその土地なりに展開するわけを気候のなりたちを求める。そして、ゆかいで楽しい生活へと改めるには自然といかにかかわればよいか、その解答を各地の先人の業績に学ぶという形をとっている。ともあれ、本巻では気候が人びとの生活にどのような影響を与えるか、人びとは気候をいかに利用するか、…を調べるのに、つごうのよい気温、雨と雪、風をあげ考えさせる。

1. 気温 では、太陽の光がまっすぐあたると、そこがいちばん暖かい。同じ緯度のところでも気温はちがっている。緯度だけで気温はきまらないのか。等々について、テーマをかかげ、なぜそうなるかの根拠を求め、土地の気温が各種の要素の組み合わせできまることが理解する。そのなかで、人びとが農作物をつくるため、日射をどう利用してきたか、仕事と能率と気温の関係はどうか…を考え、世界の人びとの衣(着物)・食(食物)・住(家)におよび、その土地なりの特色を把握し、

その工夫と努力のあとを追う。

2. 雨と雪 では、まず、世界各地の雨量分布の原則を考え、多い地方(密林)、少ない地方(砂漠や草原)での生活との関係をみる。ついで、洪水やひでりのこと、採集民や焼畑農耕民、遊牧民やオアシスのことどもが素材になる。わが国での事例は“雪国の風物詩”で紹介する。

3. 風 は、“風と子ども”の詩にはじまり、あらし(台風)の日のことが時間を追って記録されている。そして、風のひきおこす被害、いろいろな風におよぶが、風と火事、防風林…については、身近かな問題として詳細な調べがなされる。このように、風と人間とのかわりを「私は風です」により代弁する。

つまり、本巻では、「人間の生活はどこをとりあげ考えても、自然とはきりはなすことはできません。」が、昔の人は自然に追いかけれ、今の人は自然を理解し、それをうまく使いこなすことができるという。換言すれば、巻末の詩の夢を、工夫し、努力し、実現する人間を期待し、幸福を願うことになる。

順を追い、その内容の一部を紹介したが、考え、調べ、研究する問題がありすぎた。これを取捨選択のうえ、重点的計画的に取扱うことや、結果の体系化には指導者の力量によらねばならなかった。なお、比較の対照となった各地の風物や地名・用語にも配慮が必要と思われた。

## V おわりに

本シリーズ各書の巻末には、教師および父兄の方への一文をかかげ、各書が社会科学学習の手がかりを与え、その進め方を暗示する資料を提供したにすぎないとしている。こんなテキストは過去にはない。実際、(一)および(二)が示した各テーマ別の資料は、村や町の生活カレンダーを学校行事とも関連づけながら、個人・集団(グループ、

学級)による経験学習がプランニングされ、その成果のまとめ方や問題の解答が用意された。まことに親切なテキストである。各種の文体(日記・作文・新聞・見学記…)で表現されたテーマの内容を読むなかで、知識の深化がはかられた。けれども、学校現場における実情は、“ごっこ学習”・“見学社会科”に終り、その意図するものと、その結果では大きな巨離があった。(三)・(四)の研究や調査の事例も同様と思われた。

ともあれ、(一)あるいは(二)で経験した地域の研究を母胎に、(三)・(四)へと拡大し、その理論化をはかり、得られた成果を地域に還元し、その生活にいかにか生かすかを考え、実行することにあった。その意味からすれば、本書が戦後の復興期の世相をトピックに、教材化し、子どもたちに、世直しと将来への夢を与えたこと、社会科学学習の

啓蒙書となり、そのパイオニアとして果たした役割を高く評価しなければならない。これをいかに消化し、地域に還元するか、教師の指導力を問うテキストでもあったと言える。なお、のちほど、批判の対象となった基礎学力の養成に関しては、抽象化された事例で、具体化に欠け、地域的把握のための配列と体系化が必要であった。つまり、(三)・(四)に関して、確たる地理区の設定にまでおよんでほしかったのである。分野別学習(体系地理)、地誌学習が要望されたのはこのあたりに理由があったかと思う。

本稿では、戦後・学校地理の初源を、本シリーズに求め、現行地理のあり方におよぶスタートにした。今回、退官された榑原康男教授には、種々教示をうけた。自分史再考の一文を献呈し、謝辞としたい。